

夢を持ちながら、札幌で学び合おう

札幌市 NPO 法人札幌オオドオリ大学

札幌オオドオリ大学が主催する授業「ラッパーに会いに行こう」が、2015年11月1日、市立札幌大通り高校で行われた。講師を務めたのは、札幌を拠点に活動するラッパーのMC松島さん。ラッパーとは、ラップ（韻を踏みながら、喋るように歌う音楽手法）を歌う人のこと。

まず松島さんは、ラップに関する歴史や表現法について簡単に説明したあと、参加者20人に「なんでもいいですから、札幌に関連する言葉を、紙に書いて渡して下さい」と、その提出を求めた。

参加者が書いた札幌ワードが、すぐにパソコンに打ち込まれプロジェクターに映されていく。

「ラーメン」、「時計台」、「海も山も近い」、「藻岩山」、「ヨサコイ」、「雪まつり」……この言葉を使って、松島さんが即興でラップにしていく。

質問も活発になされ、松島さんが歌詞を作っているときも、受講者から「yo(ヨ)を歌詞に挿入したほうが、ラップらしくてよいのでは？」と声があがる。松島さんは「それは、面白いですね」と、すぐに歌詞に反映させる。互いに歌詞について考え、意見を言い合う。講師と受講者の距離が近く、教室に一体感があつた。

ラップが完成すると、「さあ、歌ってみ

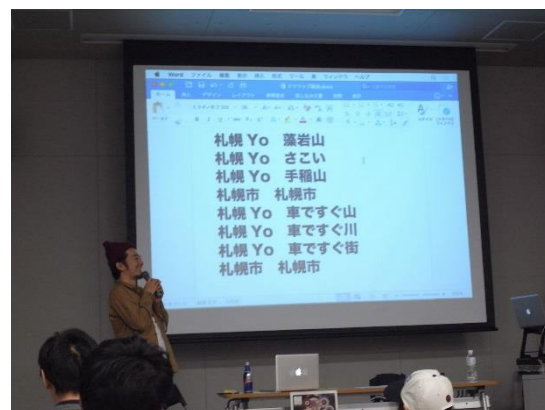
ましよう！」と松島さん。全員が立ち上がって、リズムに合わせながら、自分たちの言葉が入ったラップを歌った。

「札幌 yo 藻岩山」「札幌 yo さこい」「札幌 yo 手稲山」

「札幌市 札幌市」

「札幌 yo 車ですぐ山」「札幌 yo 車ですぐ川」「札幌 yo 車ですぐ街」

「札幌市 札幌市」……



受講者が考えた札幌に関する言葉が、プロジェクターに映される

■ 札幌の「まち」全体がキャンパス

札幌オオドオリ大学(以下、ドリ大)は、学校教育法に基づいた「大学」ではなく、市民を対象にして公開講座を行う NPO 法人。東京の渋谷を拠点として市民講座を実施している「シブヤ大学」をモデルにして、2010(平成22年)年にスタートした。

受講するには、ドリ大のホームページで学生登録をして、WEBフォームから申し込みたい講座を選ぶだけ。受講料は基本無料。参加者が多ければ抽選となり、選ばれば、メールで知らせてくれる。授業の感想などはコメントとして投稿できる仕組みになっている。参加した受講者の一人は「札幌の新しい魅力がわかった気がした」と感想を述べている。



ドリ大の授業「ラッパーに会いに行こう」の参加者たち

ドリ大は教室を持たない。札幌の「まち」全体が、いわばキャンパス。まちの魅力を、誰もが先生となり、生徒となって学び合い、どんなテーマでも授業にする。一方的に教授するといった形式ではなく、講師もまた一緒に学び、受講者と学び合うといったスタンス。「学び」と「交流」を通して、まちづくりの核になる人間関係を作っていくことを目的としている。

ドリ大の講座内容は、多岐にわたっている。

講座のタイトルだけでも、「プロから学ぶ、ボウリングの極意」、「大人の書道、自分の名前を自分の文字で」、「搾りたて牛乳を飲みながら酪農を知ろう」、「初心者のためのJAZZ講座」、「地方議員って、そう

なんだ。まちづくりの手段と地方政治」などと様々。2015年4月6日には、上田文雄前市長も「任期のこり25日『市長』の遺言」とのタイトルで講義を行っている。市内のカフェレストランで行われ、上田前市長は「もっと若い人たちに選挙に来て欲しい」と呼びかけた。

■ 学びの機会を共有したい

ドリ大の学長を務める猪熊梨恵(いのくま りえ)さんは、1985年(昭和60年)生まれ。札幌市立高等専門学校(現・札幌市立大学)で建築デザインを学んだ。学生時代から建築やアート、デザインに興味を持っていた猪熊さんは、札幌市の狸小路商店街で、自分たちの作品を自転車の荷台に積んで売り歩くという活動も行ってた。

卒業が近づくと、同級生の多くは、建築やデザインに関わる仕事をするため、東京や大阪に就職先を決めてしまい、なぜか悲しかったという。

「自分は、札幌が好きで、札幌でなにかやりたいと思っていました。でも札幌では、クリエイティブな仕事はなかなかない。それが切なくて、どうにかしたいという気持ちがありました」

猪熊さんは語る。

しかし、札幌のまちで、思っていた仕事を見つけられない。5年制の高専を卒業した後、さらに2年間の専攻科へ進学した。その1年目を修了し、再び周りが就職活動を始めようという頃、やはり進路を決めかねて休学、母親が経営する認知症のグループホームで1年間介護ヘルパーとして働いた。

年配のヘルパーや、高齢者の人々、いろいろな人と出会ったことで、学びの機会を多くの人と共有できる場所を作りたいと、考えるようになっていった。

「札幌のまちで生きる人に触れれば触れるほど、私は札幌で生きていきたいなと、強く思うようになったのです」

その後、Web制作の会社を起業しようとする友人の手伝いを始めたことから復学、卒業後はその会社へ就職した。

■ 「私、やります！」

札幌で学びの機会を共有したいとの思いを抱いていた猪熊さん。

その望みは、意外に早く実現する。猪熊さんが働いていた会社の社長が、東京の渋谷を拠点として公開講座を行っている「NPO 法人 シブヤ大学」に興味を持ったことが、きっかけとなる。そのメンバーとの交流が始まり、猪熊さんもそうした大学について詳しく知るようになった。こうしたつながりから、2009年春、札幌でもシブヤ大学をモデルにした「市民大学」への構想が一気に高まった。編集者やデザイナー、アーティスト、大学教授などの賛同者も集まった。

設立準備のための会議が行われ、翌2010年春に開校の目標を設定した。

そして、「まずは、学長を決めなければ」という状況だったとき、周りは一気に静かになった。学長の責務は重い。誰もが顔を見合わせた。

「私、やります！」

猪熊さんは、一人手をあげた。

札幌がもっと魅力ある街になるかもしれない。この市民大学がそういった方向を目指しているのでは、と直感したという。

しかし、学長の仕事は片手間ではできない。会社を辞める覚悟がないと務まらない。

周りから「猪熊、どうやって生活していくの？」

と心配されたという。

それに事務所や資金もない、ゼロからのスタートである。ただ情熱だけであったが、猪熊さんの思いに、賛同者や理事たち、運営メンバーの「札幌大通まちづくり株式会社」も全面的に協力してくれたという。

大学名は、札幌の中心である「大通り」と、ドリームの「ドリ」をかけて、夢を持ちながら、札幌で学び合おう、といった願いを込めて「札幌オオドリ大学」とした。



「札幌で学びの機会を共有したい」との思いを語る代表の猪熊さん

■ 生徒数3000人以上に

ドリ大のプレスタートとして、2009年12月に授業が行われた。講師には、元

ホームレスの人を迎え、その人生や体験談、ホームレスを支援する雑誌「ビッグイシュー」についてなどを語ってもらった。また、札幌ビール工場の貴賓室でビールを飲む会、といった一風変わった授業も行った。どちらも盛況で「これはいける」と、猪熊さんは確信したという。

月数回授業が実施され、2年目で生徒が1000人を超え、NPO法人の認証も取得。その後、ますます生徒数を増やしていった。2015年11月現在で、4歳の子供から84歳までの3050人が生徒として登録されている。授業も月2～3回のペースで行われている。

現在、ドリ大の理事は4人、法人職員10人、事務は猪熊学長を含め2人、賛助会員が100人ほどの体制となっている。先生は、上田前札幌市長をはじめ落語家、映画監督、ピアニストなど309人が登録されている。授業のプランを練るコーディネーターは15人ほどいる。

猪熊さんによれば、最初この街にドリ大を必要としてくれる人たちがどれだけいるのか不安だったという。実績を積み上げていくなかで、ある人は授業を心から楽しみ、ある人は自分の思いをドリ大で叶え、ある人は「もっと一緒にやろうよ」と言ってくれた、と嬉しそうに話す。札幌の街をまるごとキャンパスにしたドリ大という「場所」が、「みなさんの生活に少しずつ馴染んできたのでは」と語る。

「実際、老若男女、職業の垣根を超えたコミュニケーションが生まれ、開校から数年で、私自身、街を歩いていても挨拶を交わ

す人が驚くほど増えました。あらためて自分の住んでいる街が好きだ、と実感しています」

■ できるだけ経費をかけない

ドリ大の運営は、賛助会員の会費だけで賄っているため、できるだけ経費をかけないようにしているという。

「ドリ大の事務所は、ある理事の会社を利用させてもっていますが、本当の意味での事務所は自分の携帯と、このパソコンなんです」と、猪熊さんは笑う。

必要経費としては、コーディネーター料として授業に1コマに対して1万円を支払っているほか、事務員の人件費だけ。さらに、ネットや紙媒体などいろいろな形式で情報発信しているが、それも一本化して経費の削減に努めたいという。

現在、猪熊さんは、FMラジオ(AIR-G)のパーソナリティーや、誰もが気軽にモノ作りに参加できる工房「メイカーズベース」の店長も兼ねており、札幌の街を元気にするための新たなチャレンジを続けている。

■ 連絡先

〒060-0042
札幌市中央区大通西17丁目1-7

NPO法人札幌オオドリ大学
代表 猪熊 梨恵 (いのくま りえ)

TEL : 070-5067-5320
Email : odori@univnet.jp
URL : <http://odori.univnet.jp/>